



※ 報 會 樹 葉 針 ※

號 一 十 九 第 卷 通

友田純一君遭難顛末

宮 城 恭 一

我々は今年の夏山に始めて痛ましき犠牲者を山に捧げた。山岳部創設以來二十年の長き傳統に、始めて悲しき遭難者を記録した。我々は茲に故人の冥福を祈ると共に、詳かにその遭難顛末を回顧し、深くその原因を探り將來我々一橋山岳部の進むべき道を見究める上の参考に資したいと思ふ。

我が部は過去五六年の間に培はれて來た慣行として、夏には全部員が合宿として穂高或ひは劔に幕營し、全員の親密の度を加へ登山技術の向上を図ることを目的として來た。そしてこの合宿の方法が幾多の檢討の後、結局最も良きものとして我々は考へてゐた。しかるにかゝる形式の合宿は、戦時下物資不足の影響を受けて實行不可能となつてしまつた。靴、ピッケルを始めとして、器具に、食糧品に、其の他あらゆるものに不足が生じた。斯様な状態では登山靴、ピッケル、アイゼンを絶対に必要とする涸澤や劔澤では到底合宿は出來ない。そこで我々の選んだものは天幕による縦走であつた。三年前（昭和十二年）の夏に我々は劔澤に一週間の合宿を行つた後、有志約十名が其處から立山、五色、薬師、双六、槍を越えて上高地迄天幕による縦走を行ひ、大成功を納めた。之を參考として今夏の計畫を樹てようと思ふ考へは我々の間に早くから芽生え、昨年の暮には漸次有力となり、今年の五月には針ノ木から入つて五色へ出、薬師、双六、槍を経て上高地へ下ると云ふ具体的な計畫にまで進んだ。比較的到我々には未知で

あつた針ノ木峠の有様を知るために、四月と五月に其處へ入り、之ならばと云ふ自信も得た。此の計畫では雪のある所は比較的少ない。従つて登山靴の無い者も参加出来る。即ち全員が参加可能であり、一同苦樂を共にしつつ親密の度を加へながら北アルプスの中心を踏破することが出来る。以上がこの計畫を樹てた主な理由であつた。

かくして實際に豫定した行程は次の如きものであつた。

第一日 大町―籠川谷―大澤小屋

第二日 大澤小屋―針ノ木峠―針ノ木谷―平渡場

第三日 平渡場―五色ヶ原

第四日 休 養

第五日 五色ヶ原―薬師岳の肩

第六日 薬師岳の肩―薬師澤

第七日 薬師澤―祖父平

第八日 休 養

第九日 祖父平―双六池

第十日 双六池―槍ヶ岳―上高地

荷物の重いことを考慮に入れて一日の行程を短くし、適當に休養日を設けた。

六月に入り大體参加者も確定し、諸般の準備を具體的に進めた。物資不足の折から準備を進めるのに困難が多く、砂糖の入手にさへ随分苦しんだ。

かくして本科部室に豫科部室に準備會を幾度となく開催し、出發前には豫定通りに準備万端調へることが出来たのである。

次に遭難顛末を日を追つて述べる事とする。

七月十二日 新宿發

我々が待ちに待つた日は遂に來た。一同が山の如きリュックを背負つて新宿を發つたのは午後十時四十五分、一行は十三名(宮城、山田、久保、佐藤、小柳、松下、小林、友田、間々田、佐野前田、細野、柳澤)。大勢の部員に見送られて出發した。金曜の夜に十三名、今から思へば何等かの暗示だつたかも知れぬ。

七月十三日 曇後雨 松本―大町―大出(八・〇〇―九・三〇)―白澤(〇・二〇―一・一〇)―扇澤―大澤小屋(五・一〇)

どんよりした曇り日であつた。どうやら天候は悪化しさうに思はれた。大出までハイヤーを傭ひ一行中より四人、荷物を出來得る限り積んで出發し、残りはバスで大出へ行く。此處で荷物の分配を行つて愈々出發した。荷は重く相當苦しかつた。大澤小屋の近くで雨が終に降り出した。しかし幸に大して濡れず小屋に着くことが出來た。雨の中に始めから天幕を張るのを嫌つて、大澤小屋の横に無人小屋の在るのを幸ひさ其處に泊ることとした。

七月十四日 風雨強し 滞在

朝天候が恢復するように思はれたが再び悪化し、滞在したことを喜んだ。

七月十五日 風雨強し 滞在

二日滞在したため一行の疲勞は全く恢復し、荷物も大分輕くなつた。一同元氣が満ち溢れて十四日の夜のコンパの騒ぎ方は形容に窮する程であつた。

七月十六日 快晴 大澤小屋（七、三〇）―針ノ木峠（二一、〇

〇、〇〇）―南澤出合（四、四〇）―平渡場（六、二〇）

久し振りに恵まれた快晴に一行は心も軽く針ノ木峠へ向つた。

荷物の重くなるのを恐れて、最初からアイゼンをビギナーの三人に限つて持参したため、雪溪の登りは慎重を期し普通以上の時間をかけた。峠よりの眺めは素晴らしい。唯だ遙か槍、穂高の邊りに昨日迄の嵐の名残の雲が折角の眺望を妨げたのは惜しかった。

針ノ木谷には渡渉が何回もなくあり、意外に時間がかつた。平の渡場では釣橋を渡らずに、小屋を對岸に見ながら河原へ天幕を張る。月が満月に近く、黒部の溪流の音を聞きながら感激的な夜を迎へた。

七月十七日 曇、風時々驟雨 平渡場（七、二〇）―刈安峠（二

〇、二〇）―五色ヶ原（二、三〇）

折角の晴天も一日で終り、又も鬱鬱な曇天に少々落膽した。しかし今日は最も行程の短い日であるから急がずに登つた。刈安峠で大休憩をし、處々で休憩しながらも五色ヶ原へは二時半に着いてしまつた。天幕を張る時に一寸した驟雨に遭つた。雲行が早く、風が強く、一晚中天幕がバタ／＼と音を立ててゐた。

七月十八日 快晴 五色ヶ原（七、三〇）―鳶山―奥木挽山（地圖にては二五九一米の標高點）（二〇、二〇）―友田君遭難地點（一一、三〇）

早朝には未だ風は残つてゐたが、天候は次第に好轉して來た。五色を順調に出發して鳶山頂上にて小憩を取つた。見渡せば彌陀ヶ原、富山平野は言ふまでもなく、日本海まで一望の下である。

「あれが劔、その手前が立山、あれが一昨日越えて來た針ノ木峠その右の方に尖つてゐるのが烏帽子だ」と我々は夢中になつた。気分はいやが上にも昂揚する。我々は山に入つて略一週間に近くなる。それ故一同山に馴れ、身體の調子が出て來た。

一同再び張切つて歩いた。間もなく奥木挽山に着き大休憩をするこゝになつた。もはや今夜泊るべき薬師は目の前に見えてゐる。一行中の小柳が良體の調子が悪く、大部遅れてやつて來た。此處で一同パンや菓子等を攝つて隊列を調へて出發した。道は下り道となつた。目の前には雄大な薬師岳が見え、スゴ小屋も認められる。天氣は申し分ない。誰がこのすぐ後に悲劇が起らうと夢にも思つたものがあらうか。

奥木挽山より約十分下つた頃である。一行の略中間を歩いてゐた友田君がどうした機勢かアツと云ふ間に東南方へ顛落した。約四十米の岩石草附地帯を落下し、後に其の下に續いてゐた雪溪を轉落し、落ちた所から約百五十米下の雪溪の消えてゐる所で止つた。我々は茫然とした。一瞬にして我々はあの楽しい雰圍氣から急轉して悲惨な運命の渦中に居た。「友田よ、生きてゐて呉れ」心の中で呼びながら宮城、山田、久保、佐藤が藥品を持つて急援に下つた。友田君は動かなくなつた。しかし呼吸はあつた。直ぐに友田君を傍の少々平坦な所へ移した。頭部に二ヶ所致命的な傷があつた。一つは前額部稍左縦六、七厘の裂傷、一つは右顛頂部に横約四厘の裂傷であつた。その傷と夥だしき出血は我々にもはや絶望を感じしめた。急いで繃帶を巻いた。見る／＼それが鮮血で眞赤になつて行つた。咄嗟に久保は自分のしてゐた晒の腹巻を解い

て、それを友田君の頭に卷いた。不規則な呼吸があるだけで意識は全く無い。強烈な日光は容赦もなく照りつける。之を避けるために天幕のフライのみを友田君の上に張つた。我々は皆此處で茫然としてゐる譯には行かない。先づ一刻も早く麓へ知らせなければならぬ。直ちに佐藤と佐野を五色小屋及び立山温泉へ急報に走らせた。

我々は友田君の傍でもはや之以上の手當の出来ないことを歎いた。友田君の呼吸は次第に間遠になつて行つた。申譯のないことになつてしまつた。友田君の御両親に何の顔容あつてまみえることが出来ようか、先輩に濟まない、學校に濟まない。我々は唯だ奇蹟のみを祈つた。それにも拘らず終に友田君は午後二時五分絶命された。我々は暗涙を飲んで天を恨み、運命を呪つた。

直ちに山田が逝去の旨を急報のため立山温泉へ出發した。現場は縦走路よりかなり急な雪溪を下らなければならぬので、雪溪に自信の無いものは縦走路に天幕を張つて其處に待期した。宮城久保、松下、小林、前田の五人が下に残ることとなつた。此の五人で遺骸をシュラフザックに納め、附近の平坦なる所へ移し、二人用の天幕を張つて其の中へ安置した。雪溪の傍に咲く可憐な草花を手折つて、パン、菓子等と共に其の前に供へた。かくして此の五人で其の夜は友田君の傍でお通夜を行ひ、残りの四人は土の天幕でお通夜を行つた。満月は皎々と赤牛岳の上に輝き、焚火は直ぐに燃え盡きんとする。悲しみよりも心に受けたショックの方が大きかつた。思へば夢の様だ。いや悪夢だ。明日になれば其處に友田君が笑つて立つてゐるだらう。きつさうだ。今我々は

悪夢を見てゐるのだ。之が悪夢でなくて何だらう。

急報に走つた佐藤と佐野は立山温泉へ四時半着。友田遭難の旨を東京へ打電すると共に人夫二名を現場へ急行せしめた。

山田は七時半に温泉へ着き、再び東京へ打電すると共に、巡査と交渉し翌朝現場へ急行せられる様手配をした。

東京に於ける處置——本部(部員岩崎宅に置く)を中心としたる。

○午後一〇、二五 友田遭難の第一報接受(岩崎、日江井)

○一〇、五〇 友田家へ電話をなし、今夜一一、五〇上野發夜行にて日江井君同行現場へ向はれんことを勧告す。父君は時間不足故明朝出發する旨申さる。

○一一、一〇迄岩崎、日江井兩君相談し、この遭難を個人的病氣乃至負傷と考へ、先づ家族の方を可及的早く現場に導く必要ありとなし、日江井君同行し明朝出發することに決す。立山温泉に打電し具体的方策を立てること及び學校當局、部長、先輩との連絡は岩崎君が之に當ることと決す。

○一一、四〇 遭難の程度詳報せよと現場へ打電。

○一一、五五 再び友田家へ電話、明朝八時三十分上野發にて出發することとせらるべく日江井同行する旨打合す。純一君母堂御同行の由なるも行程に無理ありと考へ中止せらるべき旨傳ふ

七月十九日

快晴 遭難地點(午後五、〇〇)——五色小屋(七、四〇)

再び快晴に夜は明けた。夢ではなかつた。やはり現實だつたのだ。悲しい。我々は友田を失つたのだ。

昨夜温泉に夜を明した山田は巡査一名と共に栗巢野へ向け五時

に出發し、途中水谷で人夫二名を傭ひ現場へ急行せしむることとした。佐藤と他の巡查一名は午前八時、水谷より來た人夫二名を連れて現場に向つた。佐野は温泉で下からの連絡に當つた。

眞夏の太陽の直射の下で我々は下界からの救援を待つた。昨夜傭つた人夫二名が始めて十時半に我々の居る現場へ到着した。彼等は昨夜の中に來る筈であつたが五色小舎にて友田君死亡の旨を知り、救援の間に合はなかつた事を残念に思ひ、同夜は五色小屋へ泊つたのである。午後一時半足の早い佐藤は單身現場へ到着し我々に遭難手配の顛末を報告した。

二時半に巡查と人夫が到着し、巡查は大體の情況を見た後、直ちに遺骸引上作業に移ることとなつた。遺骸搬出の経路を五色ヶ原の方へ取るかスゴ小屋の方へ取るかに議論があつたが、スゴを通る方が近道であらうと思はれたため、一時はスゴに決めて久保と前田がスゴ小屋へ連絡に行つたが、引上作業は意外に早く行はれたため、未知の山道を辿るよりも五色ヶ原を経た方が良いと云ふことになり、五時に遺骸は人夫に背負はれて現場を出發した。引上作業は三時から約一時間で終了した。人夫四人と我々の中から四人現場へ下り、天幕を撤收し、遺品をまとめ、遺骸をシュラフより出し人夫の背負へる様に腰と膝を屈け、毛布入寢袋の外被で包み、人夫が背負つたのである。

五色小屋へ着いたのは日が暮れてからであつた。遺骸は再び二人用天幕に安置し、其の傍に六人用の天幕を張つて我々の中四人がその中にお通夜を行ひ、他の者は小屋へ泊つた。

我々の氣持は複雑であつた。明日はどうしても立山温泉へ着く。

御遺族の方々にお會ひして遺骸を御引渡ししなければならぬ。それが何よりも辛く心苦しかつた。

一方栗巢野では午後四時半上高地より急行した大塚、根本が山田と合した。六時半に友田家の使ひが一名栗巢野へ醫療器を持參せられたが、死亡された事を知り、大塚、山田と共に再び富山へ引返された。富山で此の三人は友田君の御兩親に面會し、遭難顛末を詳細に報告した。其處で常盤部長と日江井君が一行に合せられた。

東京に於ける處置

○午前、一、三〇 日江井君より電話、友田君危篤の電報入手の旨傳ふ。午前二、〇〇友田家へ通知を依頼す。

○六、一〇 川村、高野兩君に電話、高野君に西川豫科部長へ報告を依頼し、川村君には上野驛にて一行を見送るよう依頼す。

○八、〇〇 常盤先生宅、常盤部長は昨夜十一時半新宿驛發にて松本經由現場へ向はれたる由伺ふ。

○八、三〇 友田君の御兩親及び日江井君上野發にて現場へ向ふ

○九、三〇 望月先輩に面會、取敢ず今夜の如水會館にての會合の時間を決定。尙ほ大塚、根本兩君上高地より現地に赴ける由傳へられる。

○一〇、〇〇 川村、高野に會ふ。

○一一、二五 友田君危篤の電報接受。

○午後〇、一五 豫科へ電話。學校へ正式の報告をなす。井上學生主事補は本科に向はれた由。

○〇、三〇 本科太刀川學生課長に電話を以て報告。太田(可)豫

科學生主事が現場へ出張せらるゝ豫定なる旨伺ふ。

○一、○○迄の間に清水、鈴木兩君に通告。如水會館に集合を求む。

○一、三〇 吉澤一郎先輩に電話の結果富山驛からの報知として正確なる情報を伺ひ、早速本科、豫科、常盤先生宅、日江井君宛に速達にて通報。

○二、〇〇 高野君に西川先生宅訪問依頼。午後一時頃より五時半頃迄數回友田家及び友田合資會社と電話を交換し、社員三名が午後八時四十分上野發にて赴かれる旨、富山にては松井伊兵衛氏の御世話にて事を處理する旨を了知す。なほ松井氏よりの情報によれば友田君は立山温泉に下られたるものの如し。

○六、三〇 如水會館にて會合。出席者、中川、吉澤(一)、村尾、増山、望月の諸先輩。學生は岩崎、川村、高野、清水の諸君。

現在迄の處置を話し合ひ結局現在多數の部員が現場に集中してゐるため、増援の必要は切迫し居らざるものと解し、取敢ず連絡及び救援手續上に遺憾無きを期するため川村、高野兩君を派することに決定。

○八、一〇 先輩吉澤、村尾、増山、望月諸氏、部員岩崎、川村高野、清水、上野着。友田家より派遣の四氏と挨拶を爲す。ホームにて西川先生及び太刀川先生に御會し、現在迄の事情を報告す。八時四十分の出發を取止め、會社との連絡のため九時發にて出發することに變更。

○八、五〇 會社より友田君絶望の報入る。一同暗然たり。全員六名九時出發。構内食堂にて先輩及び見送りの部員相談の結果

明日先輩より一名出發することに決して散會。

○一〇、二〇 太刀川先生の命により松井伊兵衛氏へ西川先生外五名二十日に着く旨打電し、同じことを現場へも打電。

七月二十日 晴後雷雨 五色小屋(八、三〇)―立山温泉(二、三〇)

五色ヶ原の朝露を踏んで、とぼくさ下つた。打ちのめされた様な驚愕の念の方が大きかつた我々は、落着くに従つてそれよりも大なる悲歎の念が増して來るのをどう仕様もなかつた。午後二時半に立山温泉に到着した。直ちに遺骸を温泉内の藥師堂に安置した。温泉に居合せた御經の出來る按摩が心からの讀經を上げてくれた。未だ御遺族の方も部員も來て居られなかつた。

三時半に部員大塚、日江井、山田、川村、高野の諸君が醫師と共に立山温泉へ到着した。

醫師は早速檢死を始め、遺骸を清め、縋帶を新たにした。天候は次第に悪くなつて行き、物凄い雷雨となつた。天も悲んでくれたのであらう。五時に友田君の御兩親及び令弟、常盤、西川、兩先生及び根本君が到着された。間もなく藥師堂で悲しき對面が行はれたのであつた。

太田先生は一行より遅れて六時半に温泉へ到着された。

同夜は藥師堂にて一同によつて心からなる御通夜が行はれた。遙か遠くから棺を作る金槌の音が聞えて來て一同の心を打つた。

東京に於ける處置

○午前八、〇〇 宮城、山田宅へ電話。十五日附小屋發の便りにて二日遅れたる旨報ぜる由伺ふ。是にて兩君が別行動を取り居

らざるを推定す。

○八、四〇 増山先輩より電話。昨夜富山なる友田氏及び部員より友田合資會社に電話あり、午後八時頃純一君逝去の旨及び増援の必要無き旨報じ來たれる由伺ふ。

○九、〇〇 村尾先輩より電話にて問合せ。

○九、一五 五百石警察署に電話申込。

○九、二〇 清水君より電話にて問合せ。

○一〇、三五 鈴木君來訪。

○一一、〇二 「二十日部員家族温泉に集り、検屍、茶毘に附す」さの電報入手。直ちに吉澤、増山、望月諸先輩に電話にて通報。

○午後〇、一〇 本科學生課へ右の電文を報告。太田先生本日午前上野發にて現場へ向はれたる由伺ふ。

○一、一〇 吉澤先輩より電話にて、今日の立山温泉に於る葬儀には間に合はざるため先輩は出發せざる旨傳へらる。

○一、二五 友田合資會社に電話にて右の電報の件を傳ふ。

○一、三五 増山先輩より電話あり。今夜五色より遺骸を引下し立山温泉にて茶毘に附する由を友田合資會社より聽取せる旨傳へらる。

○三、〇〇 常盤先生宅より御電話。先生より御宅へ午後二時頃電報あり、先生は富山の松井伊兵衛氏と連絡を取られたる由伺ふ。尙ほ御宅にて先生に送金せられんとするも、時間外にて電報爲替の方法なき故適當の處置を求めらる。

○三、二〇 村尾先輩來訪、村尾、吉澤兩先輩と相談の結果價格表記便にて金貳百圓送金す。

○六、〇〇 友田合資會社より電話。太刀川先生の御依頼により學生に金貳百圓を常盤先生の手を通じ、松井氏から渡されたる旨、なほ現在の豫定にては富山發九、二七にて一行が明晩東京へ向ふ由を傳へらる。

○六、二〇 五百石警察署に電話通ぜるも不明確なる爲詳細なる情報は得られず、唯々今回の作業に對する謝意を表す。

○七、三〇 吉澤、望月、兩先輩に友田合資會社よりの電話の件報告。

○八、一五 常盤先生宅より御電話。先程の處置を報告す。

七月二十一日 曇時々驟雨 立山温泉(午後一、〇〇)―富山

短いと言はれる夏の夜も三時には未だ眞暗であつた。悲しみの心も新たに御遺族、先生方を始めとして一同香煙立ちこめる藥師堂に集り、しめやかに納棺の式が行はれた。東の空が白み始める頃棺は一人の夫人に背負はれて裏山へ向つた。一同は其の後に續いた温泉から約二町離れた裏山の少し開けた所に火葬の用意がされてあつた。友田君の御父君が火をつけられた。我々は山岳部歌「山讃賦」を歌つた。涙がこみ上げて來て、さもしれば聲は震え勝ちであつた。大澤小屋での楽しきコンパ。平の渡場での素晴らしかつた幕營。色々の樂しかつた事が友田君を中心として思ひ出される。それなのに君だけが今かうして我々から去つて行かれるとは山讃賦に續いて一橋會歌が歌はれた。

午前十一時 火葬は大體終了した。一同再び山讃賦を合唱し、御兩親を御向へした。悲しみの中に御骨拾ひが行はれた。

一時頃一同立山温泉を後にした。故友田君は同學年の間々田君

の背に負はれて下山の途についた。

かくして一同は富山へ歸り着いた。常盤、西川、太田の諸先生及び大塚君は警察署及び醫師へ御禮に途中から一同と別れて行かれた。

午後九時二十七分發の汽車で一同は東京へ向つた。先生方三人と大塚君は我々の汽車に間に合はず翌日の汽車で歸京された。

東京に於ける處置

○午前八、二〇 西川先生宅に明日歸京せらるゝ豫定なる旨報告

○九、一〇 柿原先輩に電話にて經緯報告。

○一〇、三〇 友田會社に電話、一行の歸京の時間確定次第通告せらるゝよう求む。

○一一、一五 國立に電話し部員に金を松井氏より渡されたることに關し及び明朝一行が上野到着の豫定なることに關し、太刀川先生に御傳言を依頼す。

○午後〇、二〇 深谷君に速達にて來訪を求む。桧淵君、清水君に電報にて當方へ電話する様求む。

○一、一〇 桧淵君宅より電話。桧淵君は今朝奥日光に出發せられ不在なる旨伺ふ。

○一、二〇 清水君より電話。當方に來訪を請ふ。

○一、四〇 柿原先輩來訪、暫く後鈴木君來訪。

○二、〇〇 中林君宅に電話、富浦臨海寮より電話にて呼返して頂くことを依頼。

○二、二〇 清水君來訪。

○二、三〇 柿原先輩歸宅。

○二、三五 友田合資會社に電話、歸京の時間を問ひ合す。

○三、一五 深谷君の歸省地へ急據上京されるよう電報を打つ。

○四、〇〇 新聞部員加藤君來る。

○四、四五 深谷君より電話、今夜上京すると傳ふ。

○五、〇五 關根、神兩君、吉澤、増山兩先輩に當方へ電話するよう打電。

○六、一〇 關根君宅より電話。富浦臨海寮から歸京する様打電を請ふ。

○六、二五 吉澤先輩より電話。明朝七、三六上野に一行が到着する豫定なる旨御傳へす。

○六、四〇 神君宅より電話。右と同じ事をお傳へす。

○六、四五 増山先輩より電話。右と同じ事を御傳へす。

○七、〇五 中林君宅より電話。富浦より歸宅する旨傳へらる。

○七、一五 望月先輩に電話。明朝七時の件を御傳へす。

○八、三五 友田會社より電話。明朝七、三六上野着確定の旨傳へらる。

○八、五五 國立太刀川先生に電話。一行明日歸京の旨御傳へす。

○九、〇〇 井上先生に電話。同様の旨御傳へす。

○九、三五 新里先生（故友田君の級擔任）に明朝上野へお迎へを請ふ旨打電。

七月二十二日 上野着（午前七、三六）

友田家の方々を始めとして、太刀川、井上兩先生、吉澤、村尾増山諸先輩、岩崎、深谷、清水、鈴木、中林其の他の諸部員及び級友等に迎へられて故友田君及び我々一行は上野驛に着いた。我

々は唯申し譯無いことをしてしまつたことをお詫びするより他に何も出来なかつた。悲しかつた。たゞ悲しくて悲しくてたまらなかつた。

七月二十三日 横濱の友田家にて御通夜が行はれた。

七月二十四日 午後二時より友田家にて告別式が行はれた。大塚兄が山岳部を代表して別記のやうな弔辭を靈前に捧げた。

そして友田君の靈は横濱市久保山墓地の一角に永久に葬むられたのである。

かくして友田君は不歸の客となられた。我々は深く此の遭難の原因を探究し、反省しなければならぬ。而して、我々は我々の山岳部をより良き山岳部となし、かゝる遭難を再び繰返さぬ様に心掛くるのが、今はなき友田君の靈をなぐさめる最大の事と信ずる。

(了)

故友田純一君略歴

大正十一年十一月十七日 横濱ニ生ル

昭和四年四月 横濱市青木尋常小學校入學

昭和十年三月 同校卒業

同 四月 神奈川縣立第一中學校入學

昭和十五年三月 同校卒業

同 四月 東京商科大學豫科入學

同 同 山岳部入部

同 同 歡迎登山岩殿山

同 七月 針ノ木越え 薬師、槍縱走中スゴ乗越附近ニ

テ遭難ス。

(法名—直心院釋純淨)

弔辭

昭和十五年七月十八日午後二時五分、北アルプス、スゴ乗越附近ニ於テ岳友友田純一君ヲ喪フ、部員一同哀惜ノ念ニ堪ヘズ、只管君ノ靈ノ安ラカナラン事ヲ祈ル。

顧ミレバ先ニ山岳部夏期登山計畫トシテ針ノ木峠ヨリ立山、槍ヲ經テ上高地ニ至ル幕營縱走ガ決定セラレ、屢々準備會が開カレルヤ君ハ毎回出席セラレ、黙々トシテ責任者ノ言ニ耳ヲ傾ケ参加ノ意志亦極メテ鞏固デアツタ。

十二日夜入山以後 兩三日雨ニ祟ラレ、十六日針ノ木峠ヲ越エ黒部川ノ平ニ到着シタ際ニモ多ク疲勞困憊ヲ啣ツノ狀デアツタニモ拘ハラズ、君一言弱音ヲ發セラレル事モ無クイツモノ通り寡黙デアリ分擔セラレタ任務ニ對シテ忠實デアツタ。

十七日天候モ次第ニ回復シ、一面ノオ花畠ノ中ニ於ケル五色ケ原ノ幕營ハ君ニトツテモ始メテノ山行ノ最モ感激的ナ一夜デアツタ様ニ見受ケラレタ。然ルニ十八日晝近クスゴ乗越ヲ間近ニ見ル奥木挽山ノ下リニ於テ全ク何等ノ豫兆モナク突然縱走路カラ踏ミ外サレ黒部川ニ轉落一五〇米ヲ落下シ、部員一同茫然タル中ニ想像モセラレヌ速サヲ以テ死ガ君ニ迫ツタデアツタ。

ソレカラ三日間ノ間ニ起ツタ種々ノ激變、殊ニ御兩親様始メ御家族様御一同ノ突然ノ御悲歎ニツイテハ、私達トシテ唯衷心ヨリ

御詫ビ申し上ゲルノミデアリマス。君ノ死ハ御兩親ニトツテノミナラズ、一橋山岳部ニトツテモ大キナ犠牲デアリ損失デアツタ。君ハ入部以來日尙淺クシテ、私達トノ交リモ漸ク軌道ニ乘リ始めタ時ニ最早別レネバナラナカツタ。

友田君、君ハ御子息トシテ山岳部員トシテ又一切ノ角度カラ見テ君ノ死ハアマリニモ早カツタ。轉落ガ偶然デアリ、ソノ瞬間カラ最早ヤ如何シヨウモ無カツタ意味カラシテ、君ノ死ハ全ク運命ノ絆ノ定ムル所デアツタトハ云ヘ、頭腦ニ於テモ體力ニ於テモ秀テ資性又清純ニシテ更ニ經濟的背景ニモ恵マレ、洵ニ豊ナル將來ヲ約束サレテキタ君ノ死ハ、諦メキレナイ高價ナ犠牲デアリ、運命ノ連鎖ノ中絶トイフニハ餘リニモ悲シイ不合理デアツタ。

私達山ヘ登ル者ハ山デ死ンデモ良イ等トハ一人モ考ヘナイシ、又一人々々自分ダケデアハ大丈夫デアルトイフ自信ヲ持ツテハ居ル。然シ山ガ山デアリ人ガ人デアル以上不慮ノ禍モ亦絶無ヲ期スル事ハ不可能デアル。私達ガ内心絶無ヲ希ヒ、生ズルヲ畏レテ居タソノ最初ノ犠牲ガ君ニナラウトハ誰ガ思ツタラウカ。山ニアツテモ都塵ニアツテモ、私達ノ仲間ハ君ノ死ニツイテ眞摯ナル反省ト思ヒ出ヲ絶エル事ナク重ネテ行キタイ。

ソシテ君ノ前途ニアツタ大イナル物ニ對シテ、私達ハ幾分ナリトモ責任ヲモツテ君ノ死カラ何等カノ結實ヲ見出ス事ニヨツテ、君ノ靈ニ對スル私達ノ弔敬ノ唯一ノ道トシタイト思フ。

昭和十五年七月二十四日

東京商科大学一橋山岳部

代表 大塚

武

故友田君を悼む

豫一 間々 田 良 雄

七月十八日、あゝ僕等は此の日を忘れようとしても忘れることが出来ない。

新しい希望に満ちた豫科生活を始めてから最初の休暇、僕等新入生はどんなにか此の時來るを待つてゐたことだらう。僕等の胸は希望で一杯だつた。野に出たい。山に登りたい。そして身體一杯に澄んだ大氣を呼吸して大自然の懷に抱かれてみたい。あの本も讀んでみたい。こんな生活もしてみたい……これら澤山の「してみたい」ことの中、僕が最も望んだのは山に行きたいことだつた。自然に接することだつた。山岳部員たる僕が夏山合宿に欣然參加したのも此の希望に應へるためだつた。蓋し友田君の感情も亦かうであつたらうと思ふ。然るに友田君はその縦走の途中忽焉として僕等の眼前から消え去つたのだ。僕等は一時、呆然として夢か現實か疑はざるを得なかつた。而もそれは嚴然たる現實であつた。痛恨極りない現實であつたのだ。思ふに友田君の眞の生活はこれから始まるころであつたし新入生總べて同じ様に、友田君は將來の設計にどんな大きな夢を畫いてゐたことだらう。どんなに希望に輝いてゐたことだらう。今それらは友田君と共に無に歸してしまつたのだ。

僕は寮に入つてゐない爲、友田君とは接する機會を殆ど持たなかつた。唯々口數の少い人だといふ印象しか残つてゐない。併し縦走に參加した豫科一年は僕と友田君だけであつたから彼の山に

對する熱情、山岳部員たるの自覺は察するに餘りあると思ふ。今にして思へば、僕は眞の同志を失つたのだ。

併し僕等は單に故人を悼み悲んでゐてそれでよいだらうか、そんな筈はない。僕等はより一層山について思索し、研究し、鍊磨して、一橋山岳部を新しい方向に導かねばならぬと思ふ。これこそ僕等が、友田君の靈をなぐさめ得る唯一の道だと思ふ。以上

亡き岳友へ

專一 前 田 道 夫

嗚乎岳友は山に逝きました。而も自分は二人目の岳友を失つたのであります。山男にとつては此の種の事故が最も悲しい。最も痛はしい事故なのは當然ですが、苛酷に胸底を衝かれる思ひがするのです。山を愛すればこそ猶更感ずるのであります。

突如背後に起つた不吉な轉落する音。振り向くと黒い塊が草の中を轉がつて行く。自分の目には黒い塊にしか見えませんでした。そして多分カッブの音でせう。カラン／＼と、草や木の葉を拂ふ音の間に混つて邊りに響き渡りました。貴兄は七、八米位草付を轉落すると忽ち見えなくなり、カラン／＼と云ふ音のみ聞えました。次の瞬間には遙か下に見える白い雪溪の急斜面を、大の字の姿で横になつて斜に這つて行き、少し速度が落ちたと見るや鈍角の方向をとつて新たな方向に頭を先にして這り、そのまゝ雪溪の終に行つて止まりました。貴兄は雪溪上では何等手足が動いて居ませんでした。止つて數秒の後大きく身體が動くのが見えました。が、すぐそれも動かなくなつて了ひました。今思ひ出して恐ろ

しい次々の光景であります。

遭難が身近にあると、登山から離れ勝になる人があります。貴兄はそれを何と考へるかは分りません。然しかス、事は自身の危険を事故に依つて感ずるが故に違ひ無く、飽く迄自己を中心としての問題です。自分は山から遠ざかつて了ふ程冷淡には如何してもなれません。僕は山に對して畏怖の念を持たないのです。過去六年間の登高に依つて、最早自分の生活は山を對象として發する様になつて居ます。そして自分の精神生活の純化、人間性の向上に多大な力を與へられて來たのです。

僕は今後今迄とは違つた意味で益々眞剣に實力を養はねばならないのです。僅かの弱點も、山上に於いては思ひ掛けない重大なシヨックを與へる事を考へる時、貴兄に對して努力と精進を誓ふ者です。

それに付けても、あの高原、あの峠の上、あの輝いた夏雲の下で、喜々として山岳の雰圍氣を味はつて居たらしい貴兄の笑を浮べた顔を憶ひ出すのです。 —一九四〇・八・一八—

友田君を悼む

豫二 小 林 茂 雄

友田君が豫科一年に入學して、山岳部にその名を列れる様になつて屢々部室の會合などで顔を合はせたが、仲々君の名前を覚えられなかつた。何時も部室の隅につゝ、ましく清慮氣味に立つてゐる謙虚な君の姿が目に見え。全く温厚といふ感じそのまゝである。何時だつたか縦走の計畫打合せの爲本科の部室に集つた歸り、

電車の中で會つて、近頃登山用具の高くなつた話などしてゐた時新しい靴を買つたと云つたから「随分高くなつてゐるだらう」と聞くさ「××圓した」と云つて嬉しさうにニツコリしたのを今だにおぼえてゐる。

君の最初にして最後となつたさも云へる今夏の縦走中、天幕は同じだつたが、君は殆ど「へばつた」と云ふ弱音もはかず黙々歩き歩いてゐた。たゞ平より刈安峠への上りに、僕の間違ひの爲、二人きりでどんぐり先へ登つた時「あゝ疲れた」ともらしたのを耳にしたが、腰を下しても「そろ／＼行きませうか」とかへつて僕がはげまされてしまつた。本隊より先へ行き、あまつさへ刈安峠より道を誤りザラ峠の方へ一寸下つて、氣が付いて引返へした時は君も大分がっかりしてゐた様子だつた。僕の不注意の爲無駄道を歩かせ洵に申譯なく思ふ次第である。

誰だつたかゞ考へた様に、ある現象が起るのはその遙か以前より凡そ吾々人間の想像をも許さぬ様な微細な無數の因子の集合によつて起るのであると考へるならば、この翌日に君の痛ましき遭難あるを思ふさ、この前日の行動がその主要因子をなしてゐるのではないかと今更ながら慙愧の念に耐へぬものがある。

静かな谷に眠る友田君の靈に。

追憶

豫二 松 下 順 吉

あの日も山々は静かに、爽やかに黄昏れて行つた。それは悲しい夕暮であつた。

羊の様な雲が碧い空を赤牛岳の頭をかすめては緩やかに流れ、薬師の方の雲は千切れて赤く染まつてゐた。風は優しい初夏のそれであつた。總ては深い山のしゞまにふさわしく灰色に包れて暮れて行つた。

それは悲しい夕暮であつた。

私は岩角に重く腰掛けてゐた。私の眼は平和な山の夕暮をねたましく見てゐた。心は吹き飛ばされさうな津波の衝動にひしがれてこはばつて空ろだつた。じつと座つてゐるさうすい膜が張られて邊がボヤけて見えた。

悲劇の谷は下にある。

あゝ。私はそこで親愛の友の死をみさり、そこで人生の最も悲痛な訣別をしなければならなかつた。やう／＼の思ひで谷を上つてこゝに掛けても、心は凍てついて動かなかつた。動かす事も出来なかつた。

淡い殘光の漂ふ空を一群の鳥が過ぎて行つた。

私は私の冷い固い心に、夢のやうな友の死を少しづゝおしへ込まうとしてゐた。風のやうな覺に友を奪ひ去られた私の心はいつかなそれを信じやうさはしなかつた。私は身動きも出來ず、身も心も鉛のやうに坐つてゐた。

今迄幾回も近しい友を失ふ悲しみに逢つたけれども、今度程傷ましき、つらき、恐しき痛切に身に覺えた事は未だ経験したことにはなかつた、そしてこの傷ましき故に、苦しみの心を蔽ふ故に、又恐しきに戰く故に、私は友田君の死に熱い涙をそゝいだ。そして同時に「山の友」といふ間柄に於てその別れに斯く熱い涙を搾ら

ざるを得なかつたといふ事は、山での友情のあるべき様をあり／＼と覚えさせて呉れた點で又涙ぐましい程有難い事實であつた。心の芯から湧き出る涙を以て送り送られる友情を學ばせて呉れた點で、私といふ人間にとつて此の上なく尊い體驗であつた。

ごく短い友であつたけれども、私と友田君は單なる交際だけの友ではなかつた。二人の間には一緒に山の生活で寡言の裡にも熱い心が脈々として流れてゐた事は私は信じないではゐられない。有爲の才と春秋とを抱いて無限の蒼穹に向つて羽搏たかれんとしてゐた友田君が逝かれたのは、御自身の爲に又御家族の爲に、學友として、山の友として惜むべき言葉を知らない。人間の言葉といふ「所在ない」ものゝ外に、自分の心を表す術を知らないのがうらめしい。

流れ星

あの夜赤牛の上にとんだ流れ星

あなたは今どうしてゐるの

それとも消えてしまつたのかい

流れ星

おまへはあの時

私の心を磨かないで

引掻いたれ

× × ×

私は部屋にひさり坐つて寫眞を見てゐる。針の木の雪溪で撮つた寫眞である。楽しい思ひ出さなつてゐたら、どんなにか心をはづませるこの寫眞も悲しい思ひ出となつて冷く、無心に元氣な友の面

影を留めてゐる。

三ヶ月。短い。併し短い一緒に生活の爲に悲しみさつらさは決して小さくはならない。それ所か、友田君に何もして上げられなかつた悔さ、初めから山岳部の部員としての友田君の熱の爲に數倍大きなものとなる。實際、友田君はいつも出て来て下さつた。黙つて何時も出て來られる友田君を見て私は頼しく思つた。そしてこの間、友田君の同級の人から、友田君が級對抗の競漕練習の時も、黙つてゐられ乍ら一番力を入れて熱心に漕がれた事や、教室でも常には黙つてゐられる事が多かつたにも不拘、英語の會話など立派にやつてのけられた事等を聞いて、實に心にヒツタリと來るものを感じ得たのであつた。三ヶ月の短い友田君の山岳部員としての生活は山岳部員の生活に範となるべき多くのものを遺して行かれた。七月の夏の合宿の爲、新しい部員に靴を作つて貰ふので私は「相談に來られ度し」と書いたまゝうっかりしてゐた。そして六月の終りだつた頃と思はれるが、電車の中で友田君に「あゝ、君は靴どうした」とか何んさか無責任な事を尋ねた所、「買ひましたよ」と云はれて、却つて恥しく思つた事もあつた。その時も私は心の中では嬉しかつた。

私は友田君の立派な人格と、山への熱意を思ひもつ／＼一緒に山岳部の生活がして行けたらと思はれてならない。

熱心にやつて下さつてゐた友田君を見ては部員として迎へ得た事を満足に思ひ、又貧しい今の豫科山岳部を盛り立て、行く力強い同志を得た事をどんなにか頼しく思つたのに。

私は友田君の死に際して、理念化しやうと思はなかつたし、そ

の氣持を分析して見る氣もしなかつた。又その餘裕さて無かつた。私は唯そのありのまゝを悲しみ、ありのまゝに涙したかつたのである。

その意味で友田君の死を私の全き心を以つてそのまゝに悲しみ謹んで追悼の言葉を捧げる。
(昭和十五年八月記)

憶　　ひ　　出

專二 佐　野　茂　雄

友田君、今でも君の死は僕には信ぜられない。何處かに居られる様な氣がする。あのざざーつといふ音をきいてゐる時間の長さ、あゝ早くさまつて呉れと祈つてゐる時、實に言ふに言はれない變な氣持であつた。實際その瞬間の如何に長かつたか、とても耐えきれないものがあつた。あの時、後に残つた我々は只啞然として一寸氣が遠くなつたやうな感じだつた。

氣を取戻して凄壯な氣分の中に我々は行動した。佐藤さん立山温泉へ下る道の實に長く、いやな感じで歩いた事は未だ嘗つてなかつた。實際直前迄一緒に元氣よく歩いてゐたのに、突然の遭難は夢に夢見る心地で氣も動轉して仕舞つた。可愛想でくならなかつた。温泉の飯もうまくなり、夜も仲々眠れなかつたのも當然の事であつた。

縦走中に於いて大澤の小舎で、我々が雨にむくれて馬鹿騒ぎをやつてゐる時に、黙つて只微笑してゐた。刈安峠を越えて五色ヶ原への途中追ひついてきて、「頂上はまだですか」とはあく息を弾ませながら尋ねる君に「まだだよ、しかしもうわけはない。つ

かれてゐるらしいからまあ休み／＼ゆつくり来るんだね」といつて僕が先に行つたのが、君と僕との會話の最後であつたのだ。終始黙々として君は頑張つて歩いてゐた姿が未だに目の前に浮かんでくる。

君と我々とは僅か二度きりの山行であつた。従つて君と友達になり切れなかつたのは非常に残念であつた。君の山への氣持ち等についてよく知り盡す事が出来なかつた。勿論進んで山岳部へ入られたのだから山への情熱は燃えてゐたのであらう。本當にまだ之からだといふ所であつたのだ。君の爲にも、我山岳部のためにも、惜しんで餘りあるものがある。我々は君が大自然に還つていつた七月十八日の日を哀しく胸に刻んで山岳部と共に生きてゆかう。
(二六〇〇・八・二十五)

そ　の　前　後

本一 小　柳　英　二　郎

頭が地につかへるかと思はれる程前こごみになりながら、一行十三人は煙雨の中を牛の如き歩みを續けて大澤小屋に到着した。十四、十五、は此處に滞在、十六日峠を越え、何處迄行つても盡くることを知らない針の木谷を何回か徒渉しながら平に、十七日五色ヶ原にさ除々に行程を縮めて行つた。十八日五色ヶ原、藥師の威容は眼前にある。一行は頗る元氣で何時も僕をラストに残す。メモを簡単に整理すればさつと以上の如くである。出發の日から相當な日數がたつてゐるにも拘らず、人嫌ひな僕は敢て新しい仲間を知らうといふ氣になれず、一年生の名前もろくにおぼえら

れなかつた。だから生前の友田君の様子を此處に再び傳へることの出来ないのは残念であるが、とまれ一行は山田、佐藤を先頭に進んで行つた。もうスゴ小屋も見えろといふ頃。一寸とした曲り角。石の出てゐる下り氣味のいやな處。右は斜面、左は底なしの谷前におくれまいと聊かあわて氣味にさばした友田。リュックがゆれる。

そんな處で、眞に、眞にあつといふ間もあらばこそ、彼は二、三間パウンドをして姿を消した。その直後を行つた僕は只「あつ!!」と言つたまゝ呆然立ちすくんだ。

山田は恐ろしく昂奮して何やらわめいた。次の瞬間、佐藤と見事なグリセードで落石の様に雪溪を下つて行つた。宮城が續く、久保が後から薬品をかゝへて。だが全ては終つてゐた。吾々は只うなだれた。その夜は上と下に分れてしめやかな通夜をした。

人夫に遺骸を背負はせて五色から立山温泉へ下つた日は口惜しい程の天氣だつた。立山温泉の近所に来るさ不思議な程赤トンボがむらがつてついて來た。それは又遭難の後で上に残つた連中がテントをはつた時、うるさい程、氣味のわるくなる程寄つて來た赤トンボを奇妙に思ひ出させた。

立山温泉には割合早く着いた。その内御兩親を始め學校關係の方が大勢見えて、吾々はやつと生氣をさり戻した。

二十一日早朝遺骸は温泉の近隣で部員に見守られつゝ淋しく茶毘に附せられた。

友田君に捧ぐ

本 一 根 本 大

悪夢の如き四日間、今靜かに顧みもつて一連の句を綴る。

七月十八日

上高地にて

暑き夜の廣きテントに計來る

裸灯に電報用紙いや白く

大きな地圖ランプに照らし夜つまる

短夜のしきいたかくいね悩む

七月十九日

アクシデント我が友にあり露の朝

熊笹の徑の朝露踏みふたり

露の朝ふたりの歩むおそろしき

焼岳は霧朝月しろくかゞやけり

安房峠

雷雲は穂高岳をめぐり空晴るゝ

高山にて

來り去り柳茂れる町あはれ

夏野ゆく飛驒ゆく車輪小さな

富山にて

驛暑し小さき車輪來てさまる

街鬱然登山靴の音哀れなり

白服の巡査にむかひしらぐさ

栗巢野にて始めて一行のYにあふ
 颯々三伏の野に一人まつ
 友の日焼靈になりにしことを告ぐ

七月二十日

湯川溪谷

雷雲や山樹はるかにさわぎをり
 雷雲のそよぎ山樹につたひくる
 雷雲のみてる山樹を遺母はゆく
 山崩る濁うづまき合歡木花垂る、

立山温泉薬師堂にて

裸灯に死の顔日焼なるかなし
 白き蟻の屍に戯るよ恐ろしき
 短夜にいのち失ひし人と寝る
 白雨去り魂逝き人と並び寝ぬ
 眞夜の霧屍と山岳部員をつゝみたる
 屍離れ小徑の月の美しき
 月光の美しき夜を通宵す

七月二十一日

まみゆこそまたなき顔の日焼かも
 棺送る息ぞ眞白くうつむける
 人夫裸體友の棺をらくくさ
 夏草の丈より高く棺ゆく
 ひと焼く炎天の野に集ひよる
 うすぐろき雪溪をみてひとを焼く

炎天の裸灯かなしひとを焼く
 夏日夢かひと焼く煙の頬による
 茂る山ひと焼く煙は低く這ふ

ひとを焼く炎見守れり花菱

遺骨を守りて

凡ゆるをつゝめる谷よ夏のトロ

故友田君を偲んで

本一佐 藤 政 雄

あれからもう二月も過ぎた。あの痛ましい光景が、雪溪に横へ
 る君の傷ついた姿が、尙ほ昨日のこのやうに、ありありと頭に
 浮ぶ。そして瞬間の出来事に先頭近くゐた僕には、否、直ぐ近く
 居た者ですら何等の施す術もなく唯、只、奇蹟を祈つた。あの惨
 劇が僕の胸をかきむしる。偉大だと云ふ人間の力の、又何ぞ微力
 なものかと。

同じ鍋の肉をつゝき、喜びに充ちて、これからの楽しい山行を
 話し合ひ、大勢の新入部員を迎へ、山岳部健在、と心秘かに悦に
 入つた岩殿山の歓迎登山に始めて君を知つた。合宿出發の夜の電
 車の停電で遅れたと飛込んで來た君の姿も印象的だった。雨に降
 込められた退屈な滞在を餘儀なくされた大澤の小舎で、雨雲を吹
 き飛ばす程の馬鹿騒ぎの中にも、只楽しさうに笑つてゐた君は、
 おとなしい人間だった。同じ炊事當番で一緒に指先が痛むほどの
 冷たい流れで米を磨いでゐた時に、家は横濱、中學校は横濱一中
 だと云ふ。級のSと云ふ先輩を知つてゐるかと問へば、知らぬと

云ふ。お互ひに無口な人間で話したさ云ふのも此の位、君との關係は淺かつたかも知れない。併し僕には君の無口なところが頼しい若者と思はれた。張切つて、豫科のKと先頭に立ち、道を間違へて、ザラ峠への道を引返して來た君の元氣な姿も、鳶山頂上で時折はれる霧の中に幻のやうに浮ぶ、坦々たる緑の富山平野、長々と延びてゐる能登半島の繪のやうに美しい眺めに、額の汗も拭かず溪から吹上げる風の肌刺す寒さも忘れて、あゝ一度富山から歸りたいと、誰に云ふさもなく誰れかがつぶやいたあの時のことも、しかも冷酷な運命の仕打に富山から君の遺骸を抱いて歸つたのも、今は只悲しい思ひ出の中に生きてゐるに過ぎない。

聞けば君は優秀な成績で豫科に入られたと云ふ。ボートのクラスチャンも漕いだと云ふ。身體もよかつた。御両親の期待の中に狭き一橋の關門を通つて喜びと誇りを以て新しい生活に、又山岳部の生活の中に、人生の華とも學生生活に一步を踏み出したばかりで、可惜十九年の短い生涯を閉じて此の世を去つた。餘りにも突然に而も餘りにも痛ましく。

「人の恐れる死の刹那の餘りにも急に、餘りに不用意な瞬間に襲はれて、知覺する暇も無い間に過去つたこの經驗は、只感謝の眼を以て迎へる外はない。幾年の後、或は幾十年の後、この八月一日を思ひ出して、あゝ幸に助かつたと喜ぶ折もあらう。或はふとあの時一々思ひに死んでゐたらと悲しく思ふ時があるかもしれない。然し何れにしても、人間として何時か死ぬものと定められてゐる以上、私個人としては、此の後幾百十年生きのびたとしても此のアルプスの雪に埋めらるべき八月一日ほど、快い死に様を或

は恐らく得られまいと残念にも思はれる。……」とこんなことを讀んだことがある。世の汚れも知らず、華々しく散つた君はその名の如く清く純潔だつた。只樂しかるべき六年の學生生活を享受し得ずに去つたことが惜しまれてならない。

何時か訪れることもあらう五色ヶ原に、雪を割つて咲き出す可憐な花に、青くも澄める大空に輝く星の中に、今は物言はぬ君の姿を見出すであらう。山を愛し、山に去つた君の靈よ、安かに冥れ。

九月二十七日

思ひ出すまゝに

本一久 保孝一郎

我々は昂揚した心情に満ちて、黙々として鳶山のピークを一つ一つ登つて行つた。三日前に越した針ノ木峠を中心に後立山の方面に夏雲が蟠屈して、その間を時々稻妻がきらめき、やがて満ちた月がその夏雲を昇つて、夜目にも途が著しい。富山平野の聚落の灯も日本海も見えろ。空には夏の星がちりばめられてゐる。何か淨土を偲ばせる様な靜かな夜だつた。我々は泣けもしなかつた。精神的衝動と肉體的疲勞と重なつてゐたが、未だ體はよく動いた。前日の御通夜の睡眠不足も今日前田と無人の陰氣なスゴ小屋に傳令に行つた徒爲も遠い昔の事の様で、體の何處か奥に妙な精氣が躍動してゐた。

然し一刻も早く遺骸を御遺族に引渡す計劃は意外に進捗して明日は實現される見込みがつき、はりつめた氣持も少しは緩んだが却而離別——人間の何うすることも出来ぬ、特に親子の絆に於て、

一橋山岳部の、學園のつながりの下で——の悲哀が、しめやかな秘めやかな激情を心の内奥に沸騰させてゐた。

我々はあの時から直に非常手配に移つた。而も餘りにあの事は瞬間的偶因的だつた。遺骸を小天幕に安置してから、我々は御通夜の場所を設けた。僅にテラス狀の岩棚を發見して、草をむしつて下に敷き、枯木を集め終つた時には、もう永い陽が没して黄昏が「悲劇」の谷に迫つてゐた。蠟燭もラテルネの無い爲に、懷中電氣も今後に備へて、君の枕頭を一晚中明るくすることは出来なかつた。間もなくさつぱり日は暮れて枯木に火をつけた。やつと落着いた氣分になれた五人は會話を交はす程にはなつたが、君は餘りにも早く我々から去つて話の種の少かつたのが残念だつた。君は食事の時間同じ天幕で、無口で隱に僕の傍に坐つてゐた。前日五色原迄僕の直ぐ後に頑張つて蹤いて來て、霧を運んで來た風にばた／＼とレインコートの裾をひらめかして立つてゐた君の姿が印象的だ。

そして今日あの谷にも清々しい朝が訪れた。夜中暗黒で見えなかつた天幕が爽やかな朝風にはた／＼動く時、君はもくもくと羽毛袋から脱け出て天幕から「おーい、皆何をしてゐるんだ。さあ往かう！」さでもどなりそんな氣がした。全く萬事惡夢であれかしと願つたが、呼鳴我々は泣かれねばならなかつた。君は遂に逝つてしまつたのだ。

友田君の死をめぐつて

本一山 田 亮 三

一寸先は闇だと云ふ言葉を、此度の事故の時程切實に感じた事は無い。幾日かの惡天候の後針ノ木から五色へ、五色から薬師へと縦走を續ける僕達を迎へて呉れたあの清朗で光輝に満ちた山々が、一瞬の後あんな残酷な魔手を振はうと誰が一體豫期し得た事だらうか。

其の二時間程前、山登るものゝみの知り得る淨福な感動に胸を躍らせつゝ、あの鳶山の頂から遠く緑の富山平野と夢の様に霞む日本海の波濤を眺めた僕達だつたのに、そして又、陰鬱な霧のヴェイルを脱棄した午前の山々は、あくまで清く高く、其の限り無い魅惑の寶庫を開いて僕達を喜び迎へる様にさへ思はれたのだつたのに。

アクシデントは一瞬にして起つた。運命なのだ、神の攝理なのだと云ひ切るには、僕達は餘りに若く、現實は餘りに苛酷だつた。あの轉瞬の出來事の後、つい今迄、僕達と同じ様に語り笑つてゐた一人の仲間が、生きて再び自分達の住む世界に歸つて來ないのだと知つた時、あの異様な錯雜した氣持を何と云へば良いのか。夢ではないんだ。あんなに恐れてゐた遭難を到々惹き起してしまつたんだ。若い一人の仲間を山で失つて了つたんだ。

空洞の様な僕の胸の中に、鋭いかなしみの情が突刺す様に入り込んで來た。

友田君其人について、餘りにも短い交渉の期間をしか持たなかつた僕は多く云ふ事は出来ない。君は寡黙な人であつた。敢て自らを誇示する事なく、眞に自らの位置を知り爲すべき事を誠實に爲し遂げて行く、あの數少い優れた人達の一人だつた。

其の尊敬すべき人柄を僕が知つたのは、あの平の露營地の夕暮の事。重荷を負ふて峠を越え、長い長い針ノ木谷を數知れぬ渡渉を繰り返して下つて來た僕達には、天幕を張つたり、焚火を拾つたりする労働はひどくつらかつた。皆な不平を云つた。ボヤ／＼さばやいた。荷物を投出して寢轉がつて了ふものも居た。其内にあつて君は一人、一言の不平を云ふ事もなく、天幕を張らねばならぬ砂原の石を取去り砂を平にして働いてゐた。僕は其姿を眺め君の内に苦痛に音をあげない本當の男を發見し、信頼するに足る仲間が又一人増えた事を嬉しく頼もしく思つたのだつた。

幸福の星の下に生れ、多幸な將來をもつて杉の若木の様に眞直ぐに伸びて來た君の死は餘りにも傷ましい。

もつともつと生かして置きたかつたと云ふ遺憾の念、計畫が無理でなかつたのか、自分が一緒に行つてゐながら何故死なせて了つたのかと云ふ自責の心、優れた一人の仲間を失つた深い悲み、此等について最早多くは云はぬにせよ、僕の終生忘れ得ぬ心の傷として残つて行くだらう。

部員としての君の生命は確かに短かつた。しかし君は部が續く限り、部と共に永久に生きて行くに違ひない。君は死んだ、そして部の精神の中に甦へたのである。

君の死を契期として、從來の部の方法が反省され止揚され、例へ小さな貧しいものではあるにせよ一箇の人間教育の場としての山岳部がより優れたものとなつて行くならば、君の死も又決して無益なものでなかつたと云へるであらう。

かくする事によつてのみ、今は既に幽明境を異にした君に對す

る僕達の責任の一半をも果し得、忠實な部員として死んで行つた君の冥福を祈る事が出来るものと思ふ。

友田君の靈に捧ぐ

本二宮 城 恭 一

その夜月は明るく星は淡く光つてゐました。

君は御通夜をする私等の前に立てられた天幕の中に悲しくも冷たく横はつてゐました。私等は之が悪夢であつてくれと心の中で必死になつて願つてみました。しかし矢張君は天國の人となつてゐられたのです。悲しみに暗然として見上げた南東の空に偶然にも水瓶座の星々がきらめいてゐるに氣がつかしました。そしてそれによつて昔の物語と君の運命とが非常に良く似てゐるのに喫驚しました。昔トロヤの王子であつたガニメーデスは全身金色を放つ美童でありました。そして人間の中で最も美しい者と讃へられてゐました。或時オリムポスの神々に仕へる酌取り役が急に罷めたので神々は非常にお困りになりました。それで大神ゼウスは大驚を放つて友達と遊んでゐたガニメーデスを攫つて來させました。そのガニメーデスが水瓶を持つて立つてゐる姿が此の水瓶座なのです。今人間の中で最も心の美しかつた君は恰も大驚に攫はれた様に忽焉と私等を残して去つてしまはれました。きつ／＼君はかのガニメーデスの如く神々の深き愛の下に天國で休らつてゐられるこゝでせう。そしてきつ／＼君は大空の何處かで夜毎夜毎きら／＼と私等を見守つてゐられることとせう。その夜私は淡く光る水瓶座を見つめて、悲みの中にこんなことを考へたのです。

●友田君遭難會計報告●

収入の部

友田君御遺族支出

一橋山岳部支出

部員負擔額

合計

支出の部

人、夫賃

宿泊費

交通費

通信費

諸禮費・雜費

合計

三〇〇・〇〇^円

一一五・〇〇

九〇・一八

五〇五・一八

一四〇・〇〇

二一五・〇〇

六〇・〇〇

二〇・一八

七〇・〇〇

五〇五・一八

鷹野雄一君戦死さる

中支の戦線に轉戦中の吾等の勇士、鷹野雄一君は去る十月十四日午後四時頃中支那浙江省某地點の戦闘に於て、迫撃砲彈を身數ヶ所にうけ、壯烈無比なる戦死をとげられた。

吾々は爰に衷心より哀悼の意を表したいと思ふ。

鷹野雄一君は昭和十一年専門部卒業、日本郵船會社に勤務、續いて昭和十二年一月松本歩兵聯隊に現役として入營、昭和十三年秋中支戦線に出征、本年八月歩兵中尉に昇進し鷹野隊長として雄名を馳せてゐたが、惜しむべし近く歸還を前にして護國の英靈と

なられたのである。

同君と最も親しかりし會員の手により追悼録、遺稿集の話も進められてゐるが、取敢へず本會報に會員諸氏よりの追悼文を載せたいと思ひますので、新編輯者小柳二郎君宛御寄稿の程切望いたします。

尙又同君の遺骨歸還せられ御葬儀等の日取決定の上は改めて御通知申し上げます。

編輯後記

永いこと會報を休刊させまして洵に申譯ありません。七月の山岳部遭難以來色々なことの爲めに私も非常に多忙でありました。十月末漸く山岳部の問題も解決いたしましたので、一安心と思ふも束の間、十一月十日に至つて仲の良かった鷹野が戦死した知らせを受け愕然としました。生前山を愛して止まなかつた彼だけに、吾々としては出来るだけの手向けをしてやりたいと思ひます。

さて編輯二年半、餘り長くなりますことは會報の氣分も變らなくて一向面白味もありませんので、次號からは小柳君が引受けて下さることになりました。いくら編輯幹事が張切つても原稿が來なくては駄目ですから、精々御寄稿の程お願い申します。

會員消息、記録、山岳部報告等は次號に譲りました。(望月記)

編輯幹事交代

原稿は今後左記へ願ひます。

大森區北千束町四七六番地 小柳 二郎 宛